

進めることをいろいろ実践しているうちに授業のすべてが変わったと話したことがある。

その教師によれば、すべての子どもの学習への参加を考えて、挙手をしなくていいこと、だれにでも話してもらいたいことなどを話して実際にそれをやろうとすると、だれを指名していいかわからない。だれでも話ができるようにするには、どんな発問がいいか、子どもの反応をどう受け止め、どんな話し合いをして、どんな板書にするか、子どもたちの考えをどうまとめていくかなど、多くのことにあれこれ思いを巡らすことになり、結局、指名1つを変えようとする試みから、授業のすべてが変わることになったという。

確かにそうなのだ。授業は「総合的な仕事」である。数多くの教師による働きかけは、児童の反応、その他と絡み合い、連動し合っている。従って、子どもたちのために何とかして自分の授業のここを工夫していきたいと小さな1つの窓口から授業の改善を試みようとするれば、授業のすべてを変えていくことになるのである。総合的な仕事だから授業は変わりにくい、本当に自分の授業を何とかしたいという1つの試みは授業のすべてを変えることになる。

義務教育課発行の「基礎学力向上の手引」でも各教科の授業改善のポイントが示されている。それらすべてを授業の中で実践していくことは土台無理なのである。「手引」を参考にその中の何か1つでも改善へ向けて取り組むことが授業を根本から変えていくことになるのである。

## 5 授業の改善を決定づけるもの

### —授業者の心（マインド）—

自分の授業の改善を決定づけるものは何か。それは、結局、授業者の心（マインド）であろう。

先に述べたように学校における子どもたちの日々の生活や学習のあり様を自分の目と手で見つめ

とらえ、子どもたちが求める学習への思いや願いをしっかりと受け止めてこの子たちを何とかしたいと思いたい教師。彼には教師として、学ぶ子どもたちに寄り添い、この子らをさらに向上させたいと思う心にあふれている。このように子どもたちを何とかしたいと強く思う教師の心が、授業の何か1つを変える。授業者の心を、今あえて「マインド・mind」と言うのは、目の前の子どもの学習状況に即して、この子を何とかしたい、そのために授業を変えなくてはと思う教師の心は、マインド（mind）であると考えからである。

mind：日本語で言えば、気をつける、心配するという意味である。教師がひとりひとりの児童・生徒を思う心をどの子にも配っていく「心くばり」、それがmind—マインドである。あの子、この子をどうするかとあれこれ思い巡らし、授業者として何らかの手だてを講じないではいられない教師の心—マインドが授業の改善の決め手なのだ。

さらにつけ加えれば、授業の改善の決め手になる授業者の心（マインド）は、日々、どんな授業を目指したいのか、授業で実現したい授業像、何とか実現したい望ましい授業像と、子どもたちがどのように学ぶ姿を実現したいか、授業者としての夢やロマンの世界がどの程度のものかにも深くかかわるものと考えられる。

